

第 16 冊

『今こそ知っておきたい災害の日本史』

岳真也、PHP文庫、2013年
<上>

災害が歴史を動かす！

筆者が小さい頃、「怖いもの」を挙げるとしたら「地震、雷、火事、親父」でした。あなたが怖いものは何でしょう？

私は「地震」が一番怖いです。突然、大地を揺るがし、建物を壊し、火事を起こし、場所によっては津波を引き起こす地震が最も怖いです。

ホームページ『雑学ミステリー』 <https://zatsugaku-mystery.com/> を見ていて「史上最悪の自然災害ランキングTOP10（被害額・死者数）」という気になるデータがありましたので、引用させていただきます。これは自然災害の大きさ・ひどさを「災害被害額」としてランク付けしたデータです。早速、第10位から紹介していきましょう。

- 第10位 北米の干ばつ（米国、メキシコ、カナダ；2012～13年）→496～561億ドル
- 第9位 北米の干ばつ（米国；1988～89年）→532億ドル
- 第8位 ハリケーン・イルマ（プエルトリコ、バミューダ諸島；2017年）→648億ドル
- 第7位 ハリケーン・サンディ（米国；2012年）→687億ドル
- 第6位 ハリケーン・マリア（ドミニカ、プエルトリコ；2017年）→916億ドル
- 第4位 ハリケーン・カトリーナ（米国；2005年）→1250億ドル
ハリケーン・ハービー（米国；2017年）→1250億ドル

いかがですか。地震が上位に入っていると思いきや、意外や意外、「ハリケーン」が多いですね。そう言えば、近年は毎年のようにハリケーンで被害のニュースを見聞きします。

それでは、TOP 3 の発表です。

第3位	四川大地震（中国；2008年）→1480億ドル
第2位	阪神・淡路大震災（日本；1995年） →1970億ドル
第1位	東日本大震災（日本；2011年） →3600億ドル

なんと、TOP 2 が日本です。国土面積が全世界の0.3%にも満たない日本で起きているというのは、やはり私たちの国日本は「災害大国」なんですね！！

上記のデータは「災害被害額」のTOP10ですが、次に「災害死者数」のTOP10のデータも先ほどの『[雑学のみステリー](#)』から紹介させていただきます。

第10位	スマトラ島沖地震（インドネシア、；2004年）→23万人
第9位	唐山大地震（中国；1976年）→24万人
第8位	アンティオキア地震（古代シリア＝現在のトルコ；526年）→25～30万人
第7位	海原大地震（中国；1920年）→27万人
第6位	カルカッタのサイクロン（インド；1737年）→30万人
第5位	コリンガのサイクロン（インド；1839年）→30万人
第4位	ボーラサイクロン（バングラデシュ；1970年）→30～50万人

地震だけでなく、サイクロンが多いですね。しかも、インドやインドネシアなどアジアの国が上位に入っています。

それでは、TOP 3 の発表です。

第3位	華県地震（中国＝明の時代；1556年）→83万人
第2位	黄河洪水（中国＝清の時代；1887年）→90万～200万人
第1位	中国大洪水（中国＝中華民国；1931年）→100万～400万人

なんと、**TOP 3 は全部中国**なんですね！随分昔のものもありますが、数字は正確なんでしょうか？

先ほどのデータは「災害被害額」なので、**経済規模の大きい日本やアメリカが上位に入る**ことが多いのに対し、「**死者数**」の方は**人口の多い国が上位**に入ってきていることがわかります。

一方、国連国際防災戦略事務局(UNISDR)が過去20年間(1998～2017年)の自然災害によって発生した経済損失額を国別に算定していますが、それによるとTOP3は次のようになるそうです。

第1位	米国	=	9448億ドル
第2位	中国	=	4922億ドル
第3位	日本	=	3763億ドル

中国が「死亡者数」でもTOP3を占めています。経済規模が日本を抜いて世界第2位になってきましたから、「災害被害額」も大きくなってきているのがわかります。

しかし、日本は、面積で言えばアメリカや中国の25分の1くらいしかないのに、**アメリカの40%に相当する「経済的損失」を被っている**ことになります。いかに、日本が「災害大国」であるということがわかります。

「自然災害の多い国TOP10」というデータもあります。そこでTOP3に挙げられている国も紹介しましょう。

第1位	日本
第2位	インドネシア
第3位	インド

うーん、やはり日本がトップなんですね。確かに、**全世界で発生したマグニチュード6以上の地震の約2割が日本で発生**しているそうですし、**全世界の活火山の7%が日本にある**そうですから、トップにならざるを得ないのですね。

これだけ地震や津波、台風などの被害が多いということは、個人の生活、いや人生そのものを大きく変えられてしまうことがありうるということですね。阪神・淡路大震災にしても東日本大震災にしても、この災害で人生を変えられてしまった人々がたくさんいたのは間違いないでしょう。もちろん亡くなった方も大勢おられます。

ならば、日本の政治も大地震や大津波などの自然災害で大きく変わってしまったこともあるのではないかな。「もし、あのとき、地震や津波がなかったら、歴史は今とは違ったものになったのではないか」と思うのです。

そんなことを思っていた時に出会ったのが、**磯田道史氏の『天災から日本史を読みなおす』(中公新書、2014年)**でした。災害に対する磯田氏の真摯な思いを知り、ますます磯田氏が好きになりました。そして、もう少し詳しく知りたいと思って読み始めたのが、今回取り上げる**岳真也氏の『今こそ知っておきたい災害の日本史』**なんです。

まずは、恒例の著者紹介から。

著者の**岳真也（がく しんや、1947年～）**氏の本名は「井上裕」氏です。東京でお生まれになり、慶應義塾大学卒業、同大学院社会学研究科を修了されています。1966年在学中に『三田文学』に「飛び魚」が掲載されデビュー。1970年7月、『胸壁（ヴァットレス）』が小学館主催の第1回小説セブン新人賞最終候補にノミネートされました。

2011年4月に歴史時代作家クラブが創設された際に、代表幹事となりました。2012年5月にはそれまでの功績により、第1回歴史時代作家クラブ賞（実績功労賞）を授与されます。一方で、永六輔氏に弟子入り、テレビ・ラジオの構成台本、CMコピーのライティング、ラジオの深夜番組のパーソナリティ、テレビのトーク番組の司会、演劇活動など多方面で活躍されています。フジテレビ日曜朝の放談番組「真っ平ご免」に糸山英太郎、落合恵子さんたちとともに出演しました。

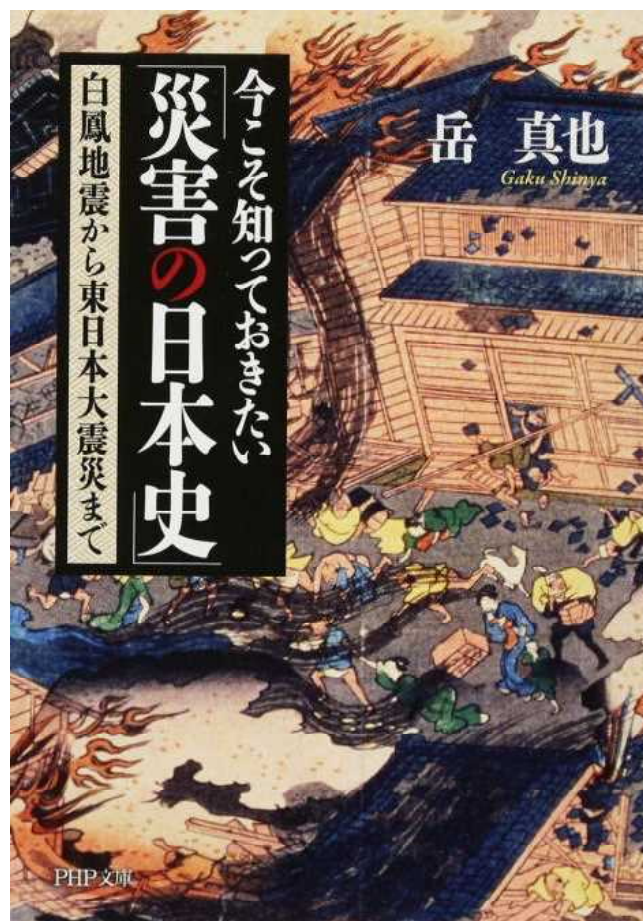
50歳を過ぎてからは時代小説、歴史エッセイなどを多く執筆されるようになります。西武文理大学客員教授や法政大学講師をつとめられました。2012年日本文藝家協会理事に就任されました。

また、著書はたくさんあり、170冊くらいの本を世に出しておられますが、毎年のように出版され筆の勢いは凄まじいという感じがします。一部を紹介しておきます。

『ばっかやろう 生きて、旅して、考えて』 仮面社 1970
『乱暴な幕明け 反骨人間探訪 対談集』 ブロンズ社 1972
『マルチ考爵の青春学入門』 ビジネス社 1973
『愛のような日々』 青娥書房 1974
『ヨーロッパ青春文学の旅』 日本放送出版協会 1976（NHKブックスジュニア）
『酒まくら舌の旅』 文藝春秋 1981 のち広済堂文庫
『インド塾の交差点 コントン世界での発見』 情報センター出版局 1984 のち広済堂文庫
『今の、インドと日本 モノを言う風速計』 情報センター出版局 1984
『在日ニッポン人の冒険 いま、日本人らしい生き方って何だろう?』 情報センター出版局 1986
『風間』 彩流社 1987
『日本語はこう書く やさしい日本語表現マニュアル』 バベル・プレス 1988
『水の旅立ち』 文藝春秋 1989
『極楽トンボのハミング紀行 Travel essays '80』 広済堂出版 1990
『福沢諭吉』 吟遊社 1991（少年・少女伝記ノンフィクション）
『タクラマカン砂漠漂流記』 東京新聞出版局 1993
『旅行記はこう書く』 自由国民社 1994
『北越の竜河井継之助』 角川書店 1995 のち学研M文庫
『われら団塊の世代』 自由国民社 1996
『麒麟 橋本左内伝』 角川書店 1997 のち学研M文庫
『吉良の言い分 真説・元禄忠臣蔵』 KSS出版 1998 のち小学館文庫
『決戦鳥羽伏見 徳川慶喜の選択』 廣済堂文庫 1998
『逃げる家康天下を盗る』 PHP研究所 1999
『言い分の日本史 アンチ・ヒーローたちの真相』 東京書籍 2000

『小栗忠順』 作品社 2001
『土方歳三修羅となりて北へ』 学習研究社 2002
『沖田総司血よ、花と舞え』 学習研究社 2003
『福沢諭吉』 全3巻 作品社 2004-2005
『史伝源義経』 学研M文庫 2004
『山内一豊』 学研M文庫 2005
『上手な旅行記の書き方 旅を書く読む本にする』 心交社 2006
『絶望しないための方法』 PHP研究所 2007
『戦国合戦「敗者」たちの言い分 何が明暗を分けたのか?』 2008 PHP文庫
『幕末維新「英傑」たちの言い分 坂本龍馬から相楽総三まで』 2009 PHP文庫
『坂本龍馬最期の日』 創美社 2010
『龍馬をめぐる「志」の人間学 幕末維新に学ぶリーダーの生き方』 東京堂出版 2011
『幕末外交官・岩瀬忠震』 作品社、2012
『真田信幸 天下を飾る者』 作品社 2015
『光秀の言い分 明智光秀好きなので。』 牧野出版 2019
『翔 wing spread』 牧野出版 2020

※著者の紹介や著書については、『ウィキペディア』を参照させていただきました。



平安京を揺るがす！

奥州の巨大地震＝貞観地震

岳真也氏の『今こそ知っておきたい災害の日本史』にはたくさんの地震をはじめ台風や火山の噴火などの自然災害が紹介されています。目次に挙げられているのは古代～現代まで全部で「42例」です。地震（津波含む）は「30例」、火山の噴火「5例」、台風「7例」です。地震が圧倒的に多いですね。

その中から、最初に取り上げるのは、平安時代、清和天皇の時代におきた「**貞観地震**」です。

早速、岳真也氏の『今こそ知っておきたい災害の日本史』から、「災害の状況」について引用してみましょう。

貞観11年（869）5月26日、陸奥国、現在の東北地方で起きた、有史以来最大級の地震が「貞観地震」である。

つい最近の「東日本大震災」とほぼ同様の地震ではないかと推測され、話題になっている。

『理科年表』によると、マグニチュード8.3以上で、陸奥（三陸）沖のプレートの移動による巨大地震と考えられる。

この地震には、比較的きちんとした記録がある。『日本三代実録』だが、地震の模様を伝える・・・多賀城の内の建物がことごとく壊れ、圧死する者や、裂けた地の底（地割れ）に落ちて埋没する者までである。人も牛馬も惨憺たる目に合っていると知れるが、この後海から大津波が押し寄せてくる様が、これもリアルに描かれている。・・・・・・

溺死者は千人ほど、と記されている。が、これはあくまでも多賀城付近のことで、記録には残っていないが、陸奥国の沿岸の広範囲で、津波による甚大な被害があったことが、近年の考古学の調査で分かっている。

マグニチュード8.3以上！！凄く大きいですね。それでも**東日本大震災はマグニチュード9.0**（日本史上最大、最大震度は宮城県の震度7、福島や栃木などでは震度6強）ですから、それに比べれば小さいことにはなりますが。

東日本大震災では強い揺れのあと、大きな津波が押し寄せてきました。地震の揺れや大津波で家屋が倒壊したり、溺死したりして**死者や行方不明者は1万5899人**（2019年、警察庁調べ）にものぼります。貞観地震では「溺死者は千人ほど」と書かれていますが、これは一部の記録でしかありません。



東日本大震災の時
津波で流された船が
ビルの上に載っている

東日本大震災では驚異的な大きさ（平均10m程度）の津波が襲ってきました。場所によっては高さが40mにもなっていたといえます。貞観地震ではどのくらいだったのでしょうか？記録に残っているのでしょうか？『[今こそ知っておきたい災害の日本史](#)』をみてみましょう。

2000年代、ボーリング調査などが行われ、仙台平野の沿岸部では「貞観地震」で津波が内陸深く遡上したことを示す痕跡が認められた。推定断層モデルから
9メートル程度の津波が、7、8分間隔で繰り返し襲来していたと考えられる。

と、あります。2007年の津波堆積物調査では、現在の岩手県から福島県、さらには茨城県沖にまで震源域が及んだ「連動型巨大地震」だった可能性が指摘されているそうです。

続きをみると、

ここまでの巨大地震はめったにないが、平安時代の初めの頃も地震の多い時期だった。そして天平時代の聖武天皇のように、「地震」とそれを引き起こすとされる「怨霊」の存在に、当時の歴代天皇も悩まされた。

この時代はまた、火山の噴火も多かった。

延暦3（784）年に桓武天皇は平城京から長岡京へと遷都する。しかし、同7年には九州の霧島が大噴火。13年には長岡京自体が大地震に襲われる。

詳細は不明であるが、少なからぬ死者も出たようで、かなりの規模であったとされる。遷都したばかりの土地での地震は、

「たいそう不吉である」

と、当時の人たちは恐れ、怯えたことだろう。

その影響もあったのか、延暦13（794）年10月23日、桓武帝は平安京への再遷都を敢行する。

とあります。

ここで、当時の時代状況を確認しましょう。**奈良時代は10年おきに藤原氏と非藤原氏との政争**が続いていました。「長屋王の祟り？」によって藤原4兄弟が疫病により相次ぎ亡くなってしまうなど、当時の人々にとって、おどろおどろしい状況の記憶がまだ残っていたと思われます。

都を遷した後の平安期になっても政争は続き、「怨霊と地震の関係」を意識せざるを得ない状況は変

わりませんでした。

「政争に敗れた者はことごとく怨霊になり、地震や噴火、干ばつ、疫病などの災いを世にもたらす」と、為政者たちに思われるようになっていました。

そして、**平安時代の最初の怨霊**が登場します。それが**早良（さわら）親王**でした。桓武天皇の弟ですね。桓武天皇にとって早良親王は邪魔な存在だったのか、**造長岡京使・藤原種継（たねつぐ、式家）**を殺害したとの口実で、淡路国へと流罪にします。

実は、この時、暗殺の首謀者を**大伴家持**と断じています。これは全く不可思議なことです。だって、大伴家持はすでに亡くなっていて、この世に存在しないのですから。

そして、配流中に絶食死した早良親王は怨霊になり、**桓武天皇の母（高野新笠＝たかのにいがさ）**や皇后に「取り憑き？」、命を奪ってしまいます。これに恐れをなした桓武天皇は、早良親王の鎮魂のための儀式を始めます。いわゆる「**御霊信仰**」です。

その後の桓武天皇ですが、自分の3人の息子を異母姉妹と結婚させて、「純潔」を保とうとします。その3人が平城天皇、嵯峨天皇、淳和天皇です。なかでも、嵯峨、淳和の両天皇が桓武天皇の政策を引き継いで平安朝の基礎を固めていくことになります。

ちなみに、**810年に平城天皇（上皇）と嵯峨天皇との間で起きた権力争いを何といいますか？また、この時、嵯峨天皇が新たに設置した令外官、ならびにその官職に就任した人物は誰でしょう？**

事件名は、**平城太上天皇の変（薬子の変）**でした。嵯峨天皇が新たに置いたのは蔵人所（くろうどころ）、その長官が「**蔵人頭（くろうどのとう）**」で、藤原冬嗣（ふゆつぐ）らが就任しました。

そして、この変に勝利したことで、**藤原北家が式家にかわって台頭していくことになりました。**

ここで、『**今こそ知っておきたい災害の日本史**』をみてみましょう。その後の動きがわかります。

天長10（833）年、淳和の後を継いで、嵯峨帝の子が仁明天皇として即位する。皇太子は、淳和帝の子の恒貞（つねさだ）親王である。

嵯峨帝と淳和帝の二組の親子が、互いに交代する格好で帝位についたのだ。しかし承和7（840）年淳和帝、同9年嵯峨帝と二人が相次いで世を去ると、たちまちにして安定は崩れる。

嵯峨帝の崩御の直後に、恒貞親王側近の橘逸勢（はやなり）と伴健岑（こわみね）が謀反の罪で逮捕され、恒貞親王自身も廢嫡（廢太子）に追い込まれてしまう。「淳和派」の貴族は一掃される。

これが「承和の変」であり、藤原北家の藤原良房（よしふさ）が「陰であやつっていた」と言われる。また、この事件こそは、藤原氏の「他氏排斥」の始まりでもあった。

仁明天皇の次に帝位につくのが文徳天皇だが、このとき24歳で、後に清和天皇として即位する惟人（これひと）親王をはじめ、記録に残るだけでも10を超える子弟子女があり、子宝には恵まれていた。

が、文徳帝は・・・「怨霊＝地震に呪われたかのような治世」に終始する。同時にまた、「承和（じょ

うわ)の変」で力を付けた藤原良房との暗躍に心身ともに疲れ果て、天安2(858)年、わずか32歳で崩御するのだ。

『今昔物語』には、文徳帝の陵墓選定を行ったとき、選定に立ち会った者たちが、その終了後に「土地神」の集団に襲われて、「幾千万もの足音に追いかけられた」という話がある。要するに文徳帝は、当時の民衆に「怨霊によって、とり殺された」とみられていたのである。

文徳帝の突然の死により、皇太子の惟人親王が9歳で清和天皇として即位する。母親は良房の娘の明子(あきらけいこ)で、良房が外戚として、一層の権力をふるうこととなる。

いやあ、平安時代初期の政治はなかなか動きがせわしないですね。おなじみの「藤原氏による**他氏排斥**」という事件がこれから続くことになります。その最初の事件が「**承和の変**」でした。年号も覚えておくと「時代間隔・感覚」が研ぎ澄まされますよ。

覚え方は、「**簀(はし)に(842)もかからぬ、承和の変**」でした。

そして、次に起こる他氏排斥事件が「応天門の変」ですね。こちらの覚え方は、「**やろう、ムカツク、応天門**」でした。



「伴大納言絵巻」

『今こそ知っておきたい災害の日本史』の続きを見ましょう。

貞観8(866)年閏3月10日、応天門が放火・炎上する事件が起きる。「応天門の変」である。

この政変の中心人物は、大納言の伴善男(とものよしお)だ。伴は伴氏の流れをくんでいるが、大納言の重職についたのは、天平時代の大伴旅人以来のことであった。その伴善男が、良房の同母弟の藤原良相(よしみ)に、「応天門は、わが伴一族が造営したものでございます。源信(まこと)が、我ら一族を呪って火をつけたのです」と告発する。藤原良相は、やはり当時政(まつりごと)の中心にいた左大臣の源信を逮捕。藤原良房が清和天皇に奏上して、源信を弁護したため、無罪となる。

ここで、状況は一転する。備中権史生(ごんのししょう)の大宅鷹取(おおやけのたかとり)が、「放火の犯人は、伴善男とその子の中庸(なかつね)です。わたくしは応天門の前から善男と中庸が走り去ったのを見ましたが、その直後に門が炎上しました」と訴えたのだ。伴父子の「自作自演」で、源信を陥れるための策謀だというのである。

伴父子は捕らえられ、厳しく尋問されるが、犯行を認めない。朝廷はしかし、彼らが真犯人であると断罪し、流刑と決した。

善男は伊豆国へ、中庸は隠岐国へ、その他親族・関係者の多くが各地へと流された。直後、不思議な

ことが起こった。藤原良相と源信の左右両大臣が、続けざまに急死する。詳細は分からず、このころの「流行」として、またぞろ「怨霊のたたり」ともされたようだが、暗殺だった可能性も否定できない。それというのも、事件の処理に当たった藤原良房は、ほどなく清和天皇の摂政に就任しているのだ。結果として、伴氏・紀氏など有力官人を排斥しただけではなく、有力なライバルも亡くなり、良房の「藤原北家」の勢力ばかりが拡大していくことになる。

なんと、藤原良相と源信の二人とも、相次いで亡くなるんですね。これもまた、当時の人々に「政争に負けた伴善男による祟り」と思われたのでした。

では、災害の影響とその後の社会がどうなっていったのかについて、まとめていきましょう。

貞観11年（869）10月13日に清和天皇は、次のような詔勅を発します。

「陸奥国の境、地震もつとも甚だしあるいは海水暴（にわか）に溢れ患いをなし、あるいは城宇（じょうう）頽圧（たいあつ）して、殃（わざわい）を致すと。百姓何の辜（つみ）ありて、この禍毒に罹（あ）わんや。憮然として愧懼（きく）するに、責め深く予（われ）に在り」（『日本三大実録』）

この最後の部分の「責め深く予に在り」は注目に値します。これは、中国伝来の「**天人感応説**」を清和天皇が信じ、自分の統治力の無さをわびているのです。

「**天人感応説**」（**天人相関説**ともいう）って何でしょう？

これは中国の考え方で、人事と自然現象（天）との間に対応関係があり、人間の行為の善悪が自然界の異変（吉祥や災異）を呼び起す、という思想です。この思想は漢代の儒家が盛んに唱えて流行したのですが、特に政治の善し悪しが天に感応して天変地異の現象となって現れると説いています。

ですから、世の中が混乱したり、自然災害が起きて多くの人が亡くなったりするのは、「天皇の徳の無さの表れである」と清和天皇は考えたんですね。ですから、自分の不徳を嘆き、民衆に謝罪しているわけですね。これは、清和天皇に限らず、聖武天皇も同じことを考えていました。

かたや京の都では、「陸奥なぞで起きた大地震は、伴善男らの怨霊のしわざである」という噂がしきりに流れた。清和天皇は「貞観地震」の起きた年に、禁止していた御霊会を復活させる。地震と疫病の神の「牛頭（ごず）天王」を京都に迎えて祭ったのだ。そうすることによって

「怨霊に対抗しようとした」

といってもよい。祇園社（八坂神社）が現在の地に置かれたのも、このころで、祇園社と祇園御霊会（祇園祭）の起源も、この地震と深く係わっている。

さらに、寺院でも盛んに祈祷が行われた。それでも地震に噴火、干ばつ、疫病などは続き、12月以降、清和帝は各地の神社に、・・・願文を出している。・・・清和天皇が精神的にもかなり追い詰められていたのがわかる。

その後も肥後、大和と地震は続き、京都での群発地震もやまなかった。貞観18（876）年には、大極殿が炎上。前後して京都の各地で放火が相次いだ。清和帝は五畿七道諸国の明神に幣帛（へいはく）を

ささげ、天下の安全を祈願している。

「もし悪人の国家を亡ぼさんと謀ることならば、皇神（すめがみ）たち早く顕（あらわ）し出だし給へ」（『日本三代実録』）

怨霊と、自らの不徳による災いを恐れたのだ。

貞観18（878）年11月22日、清和天皇は疲れ果て病いがちになり、わずか27歳で譲位する。皇太子の貞明親王が、またしても9歳という幼年で即位、陽成天皇となる。

清和帝は退位4年後に、31歳で崩御。親子2代にわたっての「地震に呪われた生涯」であった、

こののち天皇は次第に権威・権力を失っていき、藤原良房の養嗣子（ようしし）の基経が実権を握る。貞観地震は、桓武天皇を頂点とした平安朝の「皇親政治」から藤原氏による「摂関政治」へと時代が移っていく、そのきっかけともなったのである。

京の都からは遠い場所、奥州で起きた地震だったにもかかわらず、京都の政治を大きく変えていくことになったのが「貞観地震」でした。

平安京では、桓武天皇→平城天皇→嵯峨天皇→淳和天皇と続いていきましたが、この中でも重要なのが桓武と嵯峨です。桓武と嵯峨の時代に律令再建がはかられ、その1つとして**令外官（りょうげのかん）**が生まれました。

桓武天皇の時に誕生したのが（A）と（B）でした。そして嵯峨天皇の時に設けられたのが（C）と（D）でした。

さて、**（A）（B）（C）（D）に入る適語は何ですか？**

（A）と（B）は**勘解由使と征夷大將軍**ですね。（C）と（D）は**藏人頭と検非違使**でした。

嵯峨天皇のあとは、徐々に天皇の力が弱くなっていき、それとは反比例するように藤原北家の勢力が大きくなっていきました。「藤原良房→基経」の代で、いわゆる摂関政治が形成・発展していきました。そして、藤原氏が権力を掌握するためにとった政策が「他氏排斥」や「外戚政策」でした。

なかでも、他氏排斥を実施する中で承和の変や応天門の変などの事件が起きました。そして、藤原氏によって「無実の罪」で排除された人々が怨霊となって大地震や大津波を引き起こし、その怨念を晴らしていったと考えられていたのです。

今、「晴らした」と書きましたが、「晴ら」せたかという、それは難しかったでしょうね。なぜなら、政争に負けた伴善男の怨みは、本来、藤原良相と源信の二人ではなく、それを利用した藤原良房に向かうべきだからです。

しかし、藤原良房も基経も絶大なる権力を手に入れることができましたし、良房も基経も「良相と信こそが恨まれるべきあくどい人間である」と「証明」できたのですから。

武士の都鎌倉を揺るがす

永仁鎌倉地震

あなたは鎌倉の町を訪れたことがありますか？

筆者は、10年ほど前に、鎌倉の町を2日間、歩いたことがあります。初日は雨の中、江ノ島を中心に、そして2日目は円覚寺、建長寺を中心に歩き回りました。

狭い平地の奥に「鶴岡八幡宮」が鎮座し、そこからまっすぐに由比ヶ浜まで「若宮大路」が伸びています。三方を急な山（山といっても、高さはせいぜい200m程度）に囲まれ、一方を海に面していて、複雑に入り組んだ地形で、坂も多いから敵の攻撃や侵入を防ぎやすい**城塞のような町**です。

歩いていると思ったのは、「鎌倉の町は、思っていたよりも狭い」と言うことでした。京都で言えば、嵐山のような感じでしょうか。また、鎌倉の狭い町を三方から山が取り囲んでいますが、鎌倉の山って、京都の山とは随分違うなと思いました。

というのは、**北条政子**のお墓や**源実朝**のお墓を訪れた時にわかりました。山肌に穴を掘って造ってあるのですが、大きさといい、墓石といい、なんとも「ちゃちな」造りのお墓なんです。「えっ、これが将軍や将軍の妻の墓？」とびっくりさせられました。初代将軍の源頼朝のお墓を訪れる時間が無かったのですが、政子の墓も実朝の墓も唖然とさせられました。

このお墓が「やぐら」といわれる「横穴式墳墓」なんです。鎌倉は山が多く、平地がとても少なかったため、鎌倉時代の武士や僧侶が、山の岩肌に洞穴を掘ってお墓を造っていたからなんです。また、鎌倉の寺の殆どが谷戸（やと）と呼ばれる、低い山々の間の谷に造られています。



北条政子の墓がある
寿福寺 →

←北条政子の墓（左）
←源実朝の墓（右）



武士の都・鎌倉

円覚寺
山ノ内道
建長寺
三浦氏邸
往柄天神社
杉本寺
六浦路
鶴岡八幡宮
政所
大倉幕府
北条氏邸
若宮幕府
北条時政邸
釈迦堂切通し
北条時政邸
巨福呂切通し
和田義盛邸
若宮大路
今大路
滑川
材木座
前浜
由比ヶ浜
龜ヶ谷切通し
化粧坂切通し
寿福寺

『日本歴史大地図 全3巻』（ユーキャン通販ショップ）<https://www.u-canshop.jp/rekishidaichizu/>から引用させていただきました。

さて、攻めにくく守りやすい鎌倉の町を大地震が襲ってきます。「永仁鎌倉地震」が永仁元（1293）年4月13日に発生します。『今こそ知っておきたい災害の日本史』のから「災害の状況」を見ておきましょう。

鎌倉は災害に弱い町である。

城＝城塞としては最適で、

「敵方からは攻めにくく、味方には守りやすい」

という特殊な構造をしている。東西北の三方を小高い丘陵に囲まれ、南側は相模湾だ。

ただ盆地状の狭い土地に、ひしめきあうようにして建物が並んでいるので、いざ地震や火災になると逃げることができない

つまりは世に言う「将棋倒し」のごとく、地震による家や各種建造物の倒壊が連動して起こり、火が出れば類焼しやすい。あまつさえ、相模湾から津波が押し寄せて来たならば、かなり内陸まで遡上する。

源頼朝が鎌倉入りした治承4（1180年）以降だけでも、この地は何度も地震に見舞われている。

鎌倉幕府を襲った地震で、特に大きなものは三つ。

最初は仁治（にんじ）2（1241）年4月3日。

二つ目は正嘉（しょうか）元（1257）年8月23日。

そして3回目。それが正応（しょうおう）6（1293、8月に永仁と改元）年4月13日の寅の刻。鎌倉幕府をこれまでで最大の地震が襲う。「永仁鎌倉地震」である。・・・・・・・・・・・・・・・・

詳細については史料が少なく、正確なところはわかっていない。ただ伽藍や家屋などの倒壊の規模や、考古学の調査から判定し得る津波の様子から考えて、「関東大震災」や「元禄大地震」と同じ「相模トラフのプレート型の巨大地震だった」と推定される。マグニチュードは7以上。

確かに被害は甚大のようだが、死者23024人とされるが、何が根拠になっているのかわからない。・ ・

・ただ少なくとも1万人以上、多くて数万人の犠牲は出たと見て間違いない。鎌倉以外の被害は資料がないのでわからない。

関東大震災や元禄大地震と同じ「相模トラフのプレート型の巨大地震」だったんですね。しかも、マグニチュードは7以上！！結構、大きな地震です。死者は根拠不明ですが23024人と言います。

筆者の言うとおり、あの狭い鎌倉で大きな地震が起きたら、被害は大きくなるでしょうね。



鎌倉の山々
大きく削られている



さて、次に「永仁鎌倉地震」が起きた前後の鎌倉時代の状況を見ていきましょう。

鎌倉時代は、初期の源頼朝の時代を除けば、北条氏の時代と言えます。それは、初代将軍頼朝の妻が北条政子ですし、政子は2代頼家、3代実朝の実母という極めて重要な存在でした。また、政子の父北条時政、政子の弟義時も脇を固めていましたから、北条氏が他の御家人を倒して実権を握るのは当たり前かもしれません。

そして、北条氏は3代泰時、5代時頼と進む中で「御成敗式目」を制定したり、評定衆や引付衆などの組織を整備して、北条氏の時代を確実なものにしていきます。もちろん邪魔な御家人を排除するのは同じです。

ところが、8代執権北条時宗の時にいわゆる「**蒙古襲来**」が起きます。2度の来襲をしのいだ時宗は、弘安の役から3年目の弘安7（1284）年4月に亡くなります。そして、まだ14歳で嫡男の**貞時**が執権職を継ぐことになりました。

貞時には兄弟がなく、幼い貞時を支えるような有力親族も亡くなっていて、幕政は貞時の外祖父で、幕府草創の時より有力御家人として幕府を支えてきた家柄の**安達泰盛**が代行することになります。

安盛はここで「弘安の徳政」と呼ばれる改革に取り組み始めます。それは蒙古来襲で御家人も幕府も疲弊してしまっていたからです。

そこで、泰盛は九州や西国の名主・武家の所領を安堵し、御家人に編入しようと考えます。なぜかと言えば、東国に偏りがちな幕府の政治権力を、日本全国に拡大しようと意図したといえます。そのため六波羅探題や鎮西談議所（のちの鎮西探題）などの権限強化も図られました。

ところが、この改革には、幕府の経済的基盤である「関東御領の保護」及び「御家人統制」なども含まれていて、**得宗（とくそう）家**の勢力を削減したり、御家人らの既得権益をも侵したりするものでし

た。

当然のことながら、御家人たちから不満や反発が広がり、泰盛は幕府内で孤立してしまいます。なかでも、得宗の**内管領（うちかんれい）**で、貞時の乳母の夫として台頭してきた**平頼綱（よりつな）**ら「反安達勢力」との対立が激化していきます。

そして、ついに、弘安8（1285）年11月17日、「泰盛は謀反を企て、幕府をを乗っ取ろうとしております」
と平頼綱は讒言（ざんげん）します。これを聞いた第9代執権貞時は、頼綱に「泰盛討伐」の命を出します。

こうして、安達一族は一掃されてしまいます。

ここで、質問です。

「得宗」や「内管領」という言葉が出てきましたが、これって何ですか？

「得宗」とは「北条氏の嫡流の当主」のことでしたね。得宗の名前は2代執権義時が得宗と号したことに由来します。最後の得宗となるのが14代執権**北条高時**でしたね。そして最後の得宗高時の「高」をもらったのが足利「高」氏でした。ちなみに、足利氏は「源氏」です。北条氏は「平氏」です。

「内管領」とは得宗家に仕える家臣を「御内人（みうちびと）」と言いますが、その御内人のリーダーが「内管領」です。

さて、安達泰盛に代わって泰盛を討った平頼綱が鎌倉幕府の実権を握るようになりますが、**この事件のことを何と言いますか？**

そう、**答えは「霜月騒動」**ですね。

北条得宗家が自らの首を絞めた粛清劇

そして、**「霜月騒動」**の8年後の1293年に、永仁鎌倉地震が直撃するのです。

では、この災害の影響とその後の社会はどうなっていくのでしょうか？**岳真也氏の『今こそ知っておきたい災害の日本史』**から見ていきますね。

地震の規模から考えて、かなり広い範囲に、その被害は及んだに違いない。が、地震そのものの記録でさえも、鎌倉に限定したものしか残っておらず、復興となると、なおのこと不明である。

ただ、倒壊した鶴岡八幡宮や建長寺の修復・再建など、「鎌倉の復興」が優先的になされたのは確かなようで、建長寺関係の残された公文書からは・・・・・・地方の領地を直轄の管理下に置き、建長寺復興のための資金としたのだ。

さらに、である。こんなこともあった。霜月騒動で安達一族を滅ぼし、権力を掌握した平頼綱が、地震後すぐに破損した家屋敷を修復し始める。そればかりか、略奪や強盗などに対する防御のために、周辺をおのれの兵で固めさせた。

それと知って、北条貞時は「内管領に謀反の動きあり」と判断する。そして、地震から10日も経っていない正応6（1293）年4月22日、

「平頼綱を責め滅ぼすべし」と下命し、武蔵七党の御家人たちの軍勢に、経師ヶ谷の頼綱邸を襲撃させる。

頼綱は、先に討伐された安達泰盛と同様、その時の後援者の一人で、貞時の政権確立に尽くした功勞者だったが、あまりにも権力を持ちすぎたのだ。

泰盛なき今、一層、その権勢ぶりは目についた。執権就任時にはまだ幼かった貞時もすでに23歳。立派な大人になっている。

「もはや、頼綱は不要である」と判断したのであろう。

不意を突かれた平頼綱は交戦するが、利がなく自害し、その子供らも討たれる。安達氏を壊滅させた平頼綱の一族93名、今度は自分たちがことごとく討ち取られ、滅亡したのだ。

上記の下線部の事件を何と言いましたか。

これが**平禅門（へいぜいもん）の乱**ですね。大地震で人々の関心は被害の実態の把握や復興の方に向かっています。地震直後は、他人様のことよりも、まず自分や家族のことが重要です。誰もが、政治に関する意識が低くなっているときに、「狙った敵を倒す」絶好のチャンスとして利用し、間髪を入れず実行に遷していく。

若い9代執権北条貞時から見れば、あまりにも権力を持ちすぎた頼綱の存在は、「邪魔な存在」以外の何もののでもなかったのでしょう。ずっと平頼綱を倒すチャンスを探っていたのだと思います。地震を幸いに一気に「野望」を果たすことに成功します。まさに、「**地震を利用した粛清劇**」といえます。「災害が歴史を変える」典型的な例なんですね。

でも、地震の後の混乱を利用したのはわかりますが、かりにも平頼綱は内管領として鎌倉幕府を指導してきた人間です。「功績」もあったでしょう。「権力を持ちすぎたから粛清する」というのが理由では、貞時の行為は正当化できません。そのあたりのことを『**今こそ知っておきたい災害の日本史**』で確認してみましょう。

南北朝期に成立した歴史書の『宝暦間記（ほうりゃくかんき）』によると、次男の助宗（すけむね）を偏愛する父に反旗を翻し、長男の平宗綱（むねつな）が

「頼綱が助宗を将軍にしようとしている」と貞時に讒訴（ざんそ）したということになっている。

この宗綱は、いち早く出頭し、命だけは助けられたが、罪は免れず、佐渡へ配流（はいりゅう）となった。しかし後に、許されて内管領に帰りざく。

うーん、ここでも讒言なんですね。いや、「讒言を利用」して自分たちのクーデターを正当化しているのです。歴史は繰り返します。

それにしても、霜月騒動で鎌倉幕府の実権を握った平頼綱の最後は、あっけなかったです。

さて、この後、北条得宗家に反発する御家人はネズミ算式に増えていきます。鎌倉幕府は「滅亡へと一直線」に突き進むことになります。

ところで、「永仁」鎌倉地震に関連して、**1297年にある法令が出されます。目的は窮乏した御家人たちを救うことなんですが、この法令の名前は何でしょうか？**

答えは「永仁の徳政令」でしたね。

このシリーズの第1回は平安時代と鎌倉時代の地震を取り上げました。「災害が歴史を動かす」パターンを見てきました。今回もお読みいただき、ありがとうございます。

次回は秀吉が経験した「天正地震」と「慶長伏見地震」の話を中心にしていきます。